

# 望まぬ退院求める矛盾

中津市民病院（大分県中津市）の患者、西原ケイ子さん（86）には、緩和ケアセンターに入った今年4月以降、笑顔が増えた。一般病棟と違い、センターでは料理ができる。食べてくれるスタッフもいる。「料理が好きで、それを振る舞うのはもっと好き」と言う西原さんの体調は上向いた。

実は当初、5月18日のがん啓発イベント「リレー・フォー・ライフ中津」まで持たないとみられていた。センターの環境は、がんの痛みにも影響を与えたようだ。

「西原さんの場合、日中は人との関わりで気が紛れて痛みが軽減していたので、本人と相談して夜間だけ鎮痛薬を調整しました」と、副看護師長で痛みの管理に詳しい中岡美幸さんは振り返る。

西原さんはいずれ、自宅のある福岡県豊前市内の施設に移る意向だった。九州大に献体（医学実習のための遺体提供）するためだが徐々に「ここにいたい」という思いが膨らんだ。



品に西はめをいすーは料理するメニューは、手調理メタス、手揚げレ、揚げ肉、腰原豚、朝食加原豚

ところが、難題は他にもあった。

センターへの入院は原則2か月まで。西原さんはそれを超えそうだった。病院がこんなルー

ルを設けている背景には、高齢化が進むなか、在宅でのみとりを増やして医療費を抑えようという国の政策がある。

緩和ケア病棟の入院料は入院期間に応じて3段階に分かれ、60日を超えると大きく下がる。その上、厚生労働省は昨年、入院料を2種類に分け、「患者の平均

入院日数が30日以内」などの条件を満たす病院は引き上げ、その他は下げるシステムを導入した。入院の長期化は病院経営に響く。

5月下旬、改まって退院話を切り出された西原さんはつぶやいた。

「じゃあ、お鍋は誰か、もらってくれるかな」

施設に行けば料理はできないので、鍋を使うこともない。

「がんになっても時間があから、いろいろできると思っていたけれど、全然そうじゃない。ころっと逝ったら、何も考えなくていいのにな」

西原さんの目は潤んでいた。居合わせたスタッフの誰もが言葉を継げぬまま、沈黙が流れた。

「西原さんにとって料理は生きている証し。施設に行くことは、体は生きていても魂は死ぬことと同じじゃないか。これは緩和ケアのあるべき姿なのか。センター長の武末文男さんは内心、矛盾を感じた。